文化は生活の中にあってこそ資源になる！

～学術シンポジウム「地域とマンガ・アニメ」～

▲アテネ１階ロビーに特設会場を作り行われたシンポジウム

メディアフェスタ最後のキャンパスは、学術シンポジウムである。

「地域とマンガ・アニメ」をテーマとしたこのシンポジウムは、白女出身のマンガ家、安孫子三和さんと東京大学社会科学研究所助教の大堀研さんを迎え、尚絅学院大学からは准教授の秋月高太郎さんを加えた３人のパネリストと、同じく尚絅学院大学准教授の菊池哲彦さんの進行でスタートした。

家庭用テレビゲーム「戦国BASARA」から火がついた戦国武将ブームにより、観光客が増えている本市にとっては、うってつけのシンポジウムである。

２時間にわたるシンポジウムでは、作り手である安孫子さんと、マンガを教材として活用し、かつてはマンガを書いていたこともある秋月さん、そして、「観光」の視点から地方都市の地域資源とメディアとの関わりを研究している大堀さんから、それぞれの分野での意見を伺いながら、マンガに対する３人の思いを菊池さんの巧みな進行で存分に引き出してくれた。

行政と学生から、地域おこしの起爆剤として活用されているマンガやアニメに対する発表の後、進行役の菊池さんは「メディアによって増幅された地域の資源を、単に観光資源として外向きに飾り付けるのではなく、市民の生活の中で生き続ける文化資源としなければ、ブームとともに消え去る運命である」と締めくくった。

今回のメディアフェスタは、まさにこの提言を裏付けするものであったと思う。それぞれのゼミがテーマを持って調査と研究を行い、その成果をさまざまな手法を使って白石を表現していった。この成果は、協力いただいた市民の皆さんの生活に、文化資源として生き続けていることを証明してみせたのではないだろうか。

市民の皆さんが生活の中で本当に楽しむことができて初めて、ほかの人に勧めることができると思う。そして、それが魅力あるまちをつくり出すのだと確信することができた。

秋月高太郎さん
Akizuki Kohtaro

安孫子三和さん
Abiko Miwa

大堀　研さん
Oohori Ken

菊池哲彦さん
Kikuchi Akihiro

■最後に

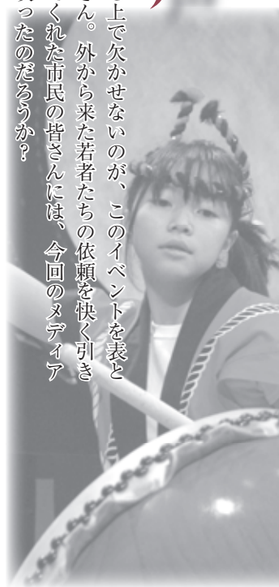
今回の尚絅メディアフェスタのテーマ「今から描きたい、白石遠近法」。白石をキャンバスに見立て、あなたならどんな色に染めるのかを問いかけたイベント。白石にはたくさんの文化があり、それらはたくさんの人によってはぐくまれているのだということがよく分かった。尚絅学院大学の学生たちも教員の皆さんも、白石を縦横無尽に走り回り、そして白石を思い思いの色に染めてくれた。

その色は、来年の第２回メディアフェスタに向けて、新たな若い力と豊富な知識が融合して、また違う色に変化していくに違いない。そして、生活の中にとけこむ新しい文化資源をつくり出し、白石を魅力あるまちとして、さらに磨きをかけてくれることだろう。私たちは、この若い力を注いでくれる機会を逃すことなく、地域づくりに活用していかなければならないのではないだろうか。（終わり）

安孫子三和さんの作品「みかん・絵日記」▶

市民の声

今回のイベントを語る上で欠かせないのが、このイベントを表と裏から支えた市民の皆さん。外から来た若者たちの依頼を快く引き受け、一緒に盛り上げてくれた市民の皆さんには、今回のメディアフェスタはどのように映ったのだろうか？



▲和太鼓倶楽部「蛍」の子どもたちは、ぽっかぽかコンサートに出演

●よさこい走乱白石城
代表　成澤　明子さん
ぽっかぽかコンサートで熱気あふれる踊りを披露

白石をどのように描くか楽しみでした

私たちのグループ自体が、地域のまちおこしを目的として結成したものです。今回のメディアフェスタも一つのチャンスと思い、ぜひ協力させていただきたいと思いました。

学生さんたちが私たち市民と一緒になって、白石をどのようにピーアールするのか、とても楽しみにしていました。皆さん本気で、こちらも自然と力が入りました。私たちにとっても今後を考える上で参考になる、素晴らしいものでしたね。

人と人との関わりから生まれてくるもの

若いカがこの白石に入り、商店街に明るい灯がともったようで、とてもうれしかったです。

４月の店の15周年イベントに、学生さんたちが見学に来てくれました。それから何度も白石に足を運んでくれて、熱心さに感動し協力させていただきました。

店を訪ねてくれる学生さんや先生方と話をしているうちに、ぜひ参加させていただきたいと思いました。私自身、尚絅学院大学の出身というのも何かの縁だと感じました。

私たちは、「人と人とが関わり合った分だけ、生まれてくる何かがある」という思いを普段から大切にしています。

カフェミルトン
三浦　敦子さん
撮影場所を提供。また、当日は街かどカフェ「ムジカノーヴァ」を出店するなど、表と裏で協力

「出会い」は素晴らしいですね。今回のために、学生さんたちが市民の皆さんにインタビューをして歩いたわけですが、予定時間以上にたくさんの話をしてくれたと聞きました。

一つの関わりを持ったことで、そこに何かのチャンスが生まれたと思います。これが良い「きっかけ」になればいいですね。

このイベントをもう少し皆さんに周知できたら、なんて欲もありましたが、まちの真ん中でこのようなイベントを開催することで、そして若い人たちがまちを歩いていることで、まちに活気が生まれた３日間でした。「白石に大学があったらなぁ？」なんて考えてしまいました。

●蔵富人　阿部　桂治さん
白石関連グッズの製作に協力

若い人ならではの感覚で、時間をかけてとても熱心に接してくれました。柿渋染めを実際に体験したり、一緒に杯を交わしたりもしました。その中で、学生たちと私たちの考え方に共通する部分があると感じました。

白石をあらゆる方向から調査し、表現してもらったことはとても意義があると思います。このことを市民の方々にはもっと知ってほしいですね。

ポジティブな発想が学生たちにはあります。これで終わりではなく、これからも一緒に活動していけたらと思います。

●専念寺　徳力　祐弘さん
博物館の展示室などに、お寺の境内を提供

白石を題材に多様な発表がありました。住んでいるとかえって気付かない、新しい視点がいろいろあったように思います。孫太郎虫もその一つですね。白石の再発見という意味では、とても意義のあるイベントでした。これをどう活かしていくかは、私たちの問題になってくると思います。

来年もできる限りの協力はしたいです。そのときは、まちの人たちともっと連動するような部分があると良いですね。

①孫太郎虫の説明をする様子　②学生たちの真剣な思いが伝わってきた
③子どもの目にはどう映ったのだろう　④たくさんの家族がイベントに訪れた